



# ハイペリカム・カリシナム (西洋金糸梅)



学校法人中部大学 総長補佐 **太田明徳**



「姫金糸梅」ともいう。オトギリソウ科オトギリソウ属 *Hypericum calycinum*。英語名では Aaron's beard、あるいは Rose of Sharon という。Aaron はモーゼの兄で、Sharon はイスラエルの地中海沿岸の平原であるので、古のユダヤ人に縁が深い名前である。表題はラテン語学名の英語読みであるが、英米人は気にしない。敬すべきポーランド出身のローマ教皇ヨハネ・パウロ二世はジョン・ポール二世であった。聞いた時には誰のことか分からず、ビートルズか

と思ったものである。近縁種に、中国原産のキンシバイ（金糸梅）、ジオウヤナギ（未央柳）など。いずれも園芸植物で、似た黄金色の花を咲かせる。金糸梅は宝暦10年（1760年）に渡来し（平賀源内「物類品隲」、西洋金糸梅は明治期らしい。

ブルガリア南東部からトルコ北東部が原産地で、高さが20～60センチほどの常緑または半常緑の灌木である。日陰や半日陰でよく育ち、走出枝により広がる。庭園の地被植物に適する。6月頃に、枝先に鮮黄色の5弁の花を咲かせる。開花直後の花の花弁は杯状であるが、間もなく伸びて萎れてしまう。100本を越える糸状の黄色の雄しべが目立ち、金糸梅の名にふさわしい。花が終

わるとすぐに雌しべの膨らんだ根元が赤い実に変わる。花言葉は「きらめき」と「悲しみは続かない」で、後の色鮮やかな実への変わり身の早さ故らしい。

正門から時計塔にかけてのケヤキ並木の下に植栽として植えられている。初めて中部大学に赴任した年には、この花が群れ咲き、明るく輝いて歓迎するかのようであった。今は雑草が混じり、一部は失われて花床の灌水ホースが見えている。

属名のオトギリソウは日本を含む東アジアに分布する。傷薬として古くから利用され、オトギリソウとは「弟切草\*」で、傷薬の秘密を漏らした弟を切ったという伝承からだそうである。

参考) 朝日百科「植物の世界」第7巻、p162-165\*、朝日新聞社1997。「園芸植物百科事典」英国王立演芸協会監修、クリストファー・ブリッケル編、横井政人監訳 p543-545、誠文堂新光社2003。日本語 Wikipedia など。